私を堕とせるのはただ一人？いや、ここからが恋人だし！

【第１話】

みなぎし　すい

【人物一覧表】

柊千咲（６）（１７）…女子高生

白石彩夏（１７）…社長令嬢

柏木奈子（３５）…千咲の叔母

神谷里見（１７）…女子高生

杉園愛梨（１７）…女子高生

飯田早苗（１７）…女優

女子生徒Ａ

女子生徒Ｂ

老人（８０）

院長（５０）

○（回想）道路

土砂降りの雨が降っている。

柊千咲（６）、担架で救急車の中に運ばれる。

千咲Ｎ「あの時、夢なんて持たなきゃよかった」

○病院・廊下

千咲を見ている医者たち。

わずかに見えている千咲の顔から、ひどくむごい傷が見える。

○同・手術室

千咲、手術を受けている。

千咲Ｎ「憧れという純粋な心は、わたしを壊した。いつか、この壊れた心を治してくれる誰かが現れたらいいのに」

（回想終わり）

○柏木宅・居間（朝）

和室。
千咲（１７）と柏木奈子（３５）、朝ごはんを食べている。
千咲「ごちそうさま！」
千咲、そばに置いてあるリュックを背負う。
奈子「今日から３年生ね。いってらっしゃい」
千咲「奈子おねえさん！　いってきます！」

○女子高・校門前（朝）
千咲、老人（８０）の荷物を持っている。
千咲「おじいちゃん、大丈夫そ？」
老人「おお、すまないのう」
千咲「このくらいお安い御用だよ」
千咲Ｎ「どうやら、わたしはこういう癖は抜けきらないらしい」
千咲「せーのっ……わたしは、桜学園女子高校の女子全員と友達になるＪＫよ！」
千咲、高らかに叫ぶ。

振り向く女子たち。

千咲「（小声で）あ、ごめんなさいぃ」

千咲、縮こまって門をくぐる。

○同・３の３教室（朝）

千咲、ゲーム機でゲームをしている。

千咲Ｍ「やっぱゲームに限るわぁ。落ち着く〜！」

○（回想）病院・病室

院長（５０）、ベッドで横になっている千咲にゲーム機を渡す。

院長「はいこれ。がんばったご褒美」

千咲「あ、ありがとう……」

（回想終わり）

○女子高・３の３教室（朝）

千咲「（寂しそうに）楽しい」

千咲、ゲーム機を見つめる。

千咲「やっぱ、これが落ち着くなぁ。忘れよ

うと思っても、忘れられないんだ」
千咲M「って、なんかポエムみたいになって
しまった」
女子生徒A「来た！」
女子生徒B「白石さんよ！」
白石彩夏（１７）、扉を開けて教室に
入ってくる。
千咲M「え。あの白石インテリジェンスの社
長令嬢さんが同じクラス？　ちょちょ、え
やばやば、すご！」
千咲、驚いた表情になってゲーム機を
床に落とす。慌ててそれを拾う。
彩夏、千咲の隣に座る。
彩夏「おはよう。何をしているの？」
彩夏。千咲に話しかける。
T「白石彩夏」
千咲「あ、えっとゲームでしゅ」
千咲、舌を噛む。
千咲「舌かんじゃった！　ご、ごへんなさい
……いたた」

彩夏「ふふっ、あなた、面白いのね」
千咲「あ、ええっと」
彩夏「緊張しなくていいわ。わたしは白石彩夏、知ってるかもしれないけど社長令嬢よ。あなたは？」
千咲「わたしは柊千咲ってい、いいますっ！」
彩夏「あははっ！　そんな、かしこまらなくてもいいわよ！」
彩夏、千咲を見て笑う。
千咲「お、お友達に……」
千咲、恐る恐る声を出す。
彩夏「もちろんいいわ。よろしくね」
千咲、嬉しそうな表情をする。
千咲N「嬉しい。この時はそう思った。でもまさかあんなことになるなんて、この時は思いもしなかった」

○公園
T「数日後」
曇り空。

千咲「あーづがれだ〜っ」

千咲、公園のベンチに座ってゲームしている。

千咲「みんな白石さんに注目してるから、わたしなんかがって、すっごい気ぃつかった……友達は超嬉しいけど」

彩夏「そんなところでゲームして。よっぽど好きなんだねゲーム」

公園に入ってくる彩夏。

千咲M「やば！　い、今の聞かれちゃってた？　せせ、せっかく友達作ったのに」

千咲「あ、白石さんっ。何してるの？」

彩夏、千咲の隣に座る。

彩夏「気になったから追ってきちゃったわ。それで、寂しそうにしてるからなにかあったのかなって」

千咲「えっ」

千咲、目を見開く。

彩夏「わたし、高校卒業したら次期社長になるの」

千咲M「なんか話し始めた……」
千咲「すごい」
彩夏「すごいんだけど、親が敷いたレールを走ってばかりの自分に最近疑問を感じて来ちゃって」
千咲「親が悩みかぁ……わたしも同じ。昔、医者を目指したことがあって、ママの育児負担が増えて家族がガタガタになっちゃって。今は親戚の家に居候してる。一回できた彼氏、わたしの弱いところ見せたらすぐどっかいっちゃって。だから、えっと。また友達ができてすっごい嬉しい」
千咲M「はっ。な、なんでこんなこと喋ってるんだろ」
彩夏「なんかイメージ通りだわ」
千咲「えっ？」
彩夏「始業式の日、老人の荷物持ってたでしょ？」
千咲「あ」

※　※　※

（フラッシュ）

千咲、老人の荷物を持っている。

※　※　※

彩夏「優しいのね」

彩夏、千咲の頭をなでなでする。

千咲「ちょ、ちょっと白石さん！　って、まさかあのバンザイも」

彩夏「ふふっ！　見たよ。全員と友達になるって？」

千咲「

彩夏、寂しそうに公園の中を眺める。

彩夏「千咲ちゃん、いろいろ気にせず喋れた。ほら、わたしってＡＩ企業の社長令嬢だしみんな尊敬の目で見てくるから、尊敬ってどこか遠いの。友達ができてもなんか違くて」

千咲「白石さんはすごいよ！　わ、わたしは尊敬してる！　……あ、そうじゃなくて尊敬してない！　あ、それも違っ、あれ、どっち？　とにかく、お友達でよかった！」

彩夏「ぷっ！　あははっ」
彩夏。ふき出して笑う。
彩夏「千咲ちゃんって本当に面白いね！　千咲ちゃんもわたしを尊敬してるみたいだけど、不思議と話しやすいわ。改めてだけど、友達になってくれる？　それと、彩夏って呼んで」
千咲「あ、彩夏っ！」
恥ずかしがる様子で声を絞り出す千咲。
彩夏「嬉しい！」
彩夏、ぱあっと明るい笑顔になる。
千咲「わ、私も好き」
千咲M「ああ。こんどは逃げていきませんように」

○通学路（夕方）
千咲N「友達、そう思ってた。だけど」
彩夏「千咲ちゃんのことが、好きなの」
千咲「……えええええええ!?」
千咲、思いっきり叫ぶ。

千咲「彩夏!?　なな、何言ってるの？」
彩夏「千咲ちゃんかわいいし、面白いし、優しいし。何より、今までで一番喋りやすい。こんなにいい人他にいないなって思って」
千咲「いやいや、わたし女の子だからっ！こ、こんなのって聞いたことないよ！」
彩夏「ここ女子高だしなにも問題ないよ？たぶんそういうの他にもいると思う」
千咲「いやそういう問題なの!?　こ、恋人はちょっと」
彩夏「そう」
彩夏、しゅんとする。
千咲「あ、嫌いってわけじゃないの！」
彩夏「じゃあ、恋人になってほしい」
彩夏、千咲を抱き寄せる。
2人の顔が近づく。
彩夏「ほら、愛に年齢差なんて関係ないってよくいうでしょ？」
彩夏、千咲をじっと見つめる。
千咲「それ年であって性別じゃないからっ」

２人、離れる。
千咲「だからっ。友達っていうのはたのしいことするものなの！　それがここだとすると、恋人はここ！　……いや、ここからが恋人だし！」
千咲、手で友達と恋人の高さを指し示す。
千咲「あ、でも友達と恋人って縦軸違うからこうかな？　とにかく、友達だからっ」
彩夏「だめ？　社長令嬢だからなんだってあげるよ？　それに楽しいことなら、２人っきりであんなことやこんなことだって」
千咲「いやいやそこまでいかないよ!?」
彩夏「だめ？」
千咲「ええええっとお……」
千咲、額に手をあてる。
彩夏「好きって言ってくれたのにぃ！」
彩夏、駄々をこねる動作をしてほっぺをふくらませる。
千咲「いやいや！　あれは！　好きだけど！

好きじゃなくはないけど！」

彩夏「ありがとう！　じゃあ、これからよろしくね！」

彩夏、笑顔で手を振りながら走り去る。

千咲「彩夏〜っ！」

千咲、呆然とする。

千咲M「勘違いされてるんですけど！　ちょ、わたしこれからどうなっちゃうの!?」

○柏木宅・居間（夕方）

千咲、床に寝転んでいる。

千咲M「いやいやマジどうなってんの？　あ、あの白石さんがわたしなんかに!?」

千咲、顔を赤くする。

○（回想）公園

彩夏、ぱあっと明るい笑顔になる。

千咲「わ、私も好き」

（回想終わり）

○柏木宅・居間（夕方）

千咲M「あの時友達を手放したくなくて、とっさに好きって言っちゃったからなぁ。言い訳するときも、好きから入っちゃったから余計な誤解が……あああああ！　これはなんとかしなきゃ」

奈子「どうかした？　社長令嬢っていうお友達と何かあった？」

千咲「ぶえっ!?　ちょ、ちょっと奈子おねえさん？　何いってんの!?」

奈子「ちょっと聞いただけなのに」

千咲「はっ」

奈子「よくわかんないけど、何かあったら相談しなさい。特にお友達の悩みとか」

奈子、千咲をなでる。

千咲M「これは今回のこと言い当ててるわけじゃないよね？　奈子おねえさんにはいつも悩み相談とかしてたし。奈子おねえさんに変に思われたくないし、同性カップルのことなんて相談できないなぁ……いやいや、

カップルじゃないから！」

千咲、顔を赤くして悶々とする。

奈子、きょとんとした表情で千咲を見つめる。

○女子高・3の3教室

千咲、ゲームをしている。

千咲M「結局、ここ校則ゆるくてほんと楽だわぁ。勉強のことなんて忘れられて、昼休みって最高〜っ！」

千咲、満面の笑み。

千咲M「にしても、数日経って彩夏の注目度も減ってるっぽい。まあ数日経てばそんなもんか。社長令嬢とお近づきなんて恐れ多いもんね……」

彩夏、教室に入ってくる。

彩夏「千咲ちゃん！」

笑顔で千咲に声をかける。

千咲「げ」

彩夏「千咲ちゃんにプレゼント持ってきたの」

千咲「ちょちょ、こんなとこで何かんがえてるの？　ってか、後ろの人たちは？」

千咲の視界が、彩夏の後ろの神谷里見（１７）、杉園愛梨（１７）、飯田早苗（１７）を見つける。

千咲「ひええっ！　が、顔面偏差値高すぎてまぶしい……」

千咲、顔を腕で覆う。

彩夏「ああ、この人たちは友達よ」

千咲「……ほんとうに友達？」

千咲、顔を隠している腕をどける。

彩夏「あ、もしかして浮気気にしてる？　大丈」

千咲「わあああああーっ！」

千咲、思いっきり叫ぶ。

クラスメイトが振り向く。

千咲「とっ友達！　友達だから！」

クラスメイト、視線を戻す。

早苗「あなた、声が大きいわ。どうしたの？」

千咲「ひえっ！　ご、ごめんなさい……し、

白石さんの友達ですっ」
千咲M「風紀委員長だ……しかもこの人、わたしの推しの女優じゃん！　やば、眼福」
千咲、びくびくする。
早苗「それは聞いたわ」
愛梨「彩夏と、お友達になったの？　す、すごいね……」
千咲M「地雷系っぽい髪型……」
里見「なんで令嬢の彩夏に！　一般人の友達できてんだよぉぉぉぇ」
千咲M「たぶん毒舌……なんかすっごい個性的なメンバー集まってる気がする……」
千咲、はっとする。
千咲「あ、あの！　実は、ファンです」
早苗「そう」
千咲M「そうそう！　このぶっきらぼうっぽいのがいいんだよねぇ！　……てか、この様子だと勘違いを言ってないみたいで助かったぁ。このままバレるなバレるな……」
彩夏「で～、千咲ちゃん。これ、お菓子プレ

ゼント」

彩夏、千咲に体を寄せる。そのまま小さい袋に詰めたクッキーを渡す。

千咲「近いってば！」

彩夏「別にいいでしょ。はい、今食べて」

千咲「なんで今」

千咲「わ、わかったから！　お菓子ありがとう！」

千咲、クッキーを口にほおばる。

千咲「んまっ」

目を見開く千咲。にこにこしながら千咲を眺めている彩夏。

早苗、じとっとした目で千咲を見つめる。

彩夏「千咲ちゃん」

彩夏の胸が千咲の腕に当たる。

千咲「ちょ、当たってる！」

彩夏「いいでしょ？」

千咲「は、恥ずかしいからっ！」

彩夏「かわいい……」

千咲「も～っ！」
愛梨「ね、ねえ千咲ちゃん。千咲ちゃん、でいいよね」
千咲M「いきなり名前呼びだ……よかった、この人たちとも友達になれるかな」
千咲「うん！　ぜひお友達になろうっ！」
愛梨「わ、わたしもうれしい」
里見、ショートケーキ1切れとフォークを取り出し、食べ始める。
千咲、それを見る。
里見「よく毒舌って言われるからよ、甘いもん食って気をまぎらわせてんだよ」
千咲「やっぱ個性的だ」
里見「あぁ!?」
千咲「あ、ごめん」
里見、ショートケーキを完食する。
里見「別に謝らなくていい。こんななのはもとからだから気にすんな。で、柊、あたしと友達になってくれんのかよ？　言っとくけどおすすめはしねえぜ？」

千咲「う、うん！　もちろん！」
里見「ったくなんであたしなんかと友達になりやがるんだよぉぉぇ！」
千咲M「よかった、いい人そうで」
愛梨「ね、ねえ里見ちゃん。ご、ごめんね……」
愛梨、おどおどしながら里見の制服のすそをそっと掴む。
里見「お前はなれなれしくすんじゃねえよ！なんでまだあたしについてきてんだよ！」
愛梨「ご、ごめんね……」
千咲M「あれ、なんかこんどは普通に……」
早苗「柊。この２人は、２人っきりにしない方がいいわ」
早苗、千咲にそっと耳打ちする。
千咲「う、うんっ」
千咲M「やっぱ、女優の耳が近すぎて尊死する～っ！」

○柏木宅・居間（夕方）

千咲、床に寝転がってゲームをしている。

奈子「宿題は大丈夫？　ゆっくりでいいから忘れないようにね」

千咲「うん！」

千咲M「ああ、やっぱ奈子おねえさんは優しい。何があってもきっと」

奈子「なんだか嬉しそうね」

千咲「うん！　だって、お友達がいっぱいできたの！　っていっても、社長令嬢さん含めて4人だけど」

奈子「いいね！　もっかい、令嬢さんのこと含めてよく聞かせてよ」

奈子M「また千咲ちゃんが失敗するのは見たくないから。わたしが聞いてあげないと」

千咲「うん！」

千咲M「絶対、恋人うんぬんは言っちゃだめだ。そういうのだって思われたくないし」

千咲、詳細を話す。

奈子「いいお友達じゃないの！　お菓子まで

くれるなんて」

千咲「（少し苦笑い）あはは」

千咲M「その彩夏に告られてなんか勘違いされてるんだけど……早く誤解解かなきゃ」

○女子高・廊下（朝）

千咲、廊下の壁にもたれかかって腕を組んでいる。

千咲M「とはいったものの……どうしよ。マジで困った……お友達は絶対やめたくないしなぁ」

早苗「柊」

千咲「さ、早苗さん？」

早苗、千咲に壁ドンする。

千咲「ひゃあっ！」

千咲M「推しからの壁ドンやばぁっ！」

早苗「放課後、話があるわ。あなたと、２人っきりで」

千咲「ふ、２人っきり？」

早苗「ええ。他の約束がなければ今ここで首

を縦に振りなさい」
早苗、威圧感のある顔で千咲にせまる。
千咲、小刻みに素早く首を縦に振る。

○同・屋上（夕方）
千咲と早苗の２人っきりの屋上。
夕日が２人を照らしている。
千咲Ｍ「どどどうしよ？　も、もしかして告白じゃないよね？　彩夏が女子高ってそういうのあるって言ってた！　でも、推しと付き合えるっていいかも……いやいや、そんなのないない！」
千咲、頬を赤くする。
早苗「そろそろいいかしら」
千咲「ひゃいっ」
早苗「柊、彩夏とどういう関係？」
千咲「え、ええっと……こ、これはやばいやつでは……？」
早苗「柊と彩夏の様子を見ていて、違和感があったのよね」

早苗、千咲をじっと見つめる。

千咲「はい終わったー！」